



2018年9月発行

善人すぎるな、賢すぎるな

善人すぎるな、賢すぎるな、どうして滅びてよかろう。

(コヘレトの言葉7章16節)

なぜこんな言葉が聖書にあるのでしょうか。「善人すぎるな、賢すぎるな」、悪事を行ったり、愚かすぎるものが戒められているのは当然ですが、ここではなんと善人でありすぎることと賢すぎるものが戒められているのです。

善人は栄え、悪人は滅びるべきです。しかし残念ながら、現実には必ずしもその通りにはなっておりません。もちろん世の中で成功している人にはそれだけの理由がありますから、善人で栄える人がいることは事実です。しかしそれに当てはまらない例は多いのです。

そこで、この言葉は間違っているという人がいるわけです。信仰とは人を罪と愚かさから遠ざけ、悪人を善人に、また賢くするものだから、これを否定しようとする言葉は断じて認められない。善人すぎて、賢すぎて、そのためにたとえ滅びてしまうことがあっても、それを受け容れるのがキリスト者ではないか、というわけです。

その次に出て来るのが、これはコヘレトが書いた言葉ではあっても神の言葉ではないから、慎重に判断すべきだという考え方です。これはあくまでも人間コヘレトの言葉ですから、神の言葉に対するほどうやうやしく拝聴する必要はないということになります。

一方、これとは反対に、コヘレトの考えが自分の考えにぴったりだという人もいますでしょう。これが人間の現実的な生き方だと思っただけです。悪の道にのめりこんで身を滅ぼしてしまったり元も子もありませんが、逆に清く、貧しく、美しく世の中を渡ってゆくのも困難で、人生でいろいろ決断が迫られる時に、あまり潔癖にあれかこれかを決めてしまわず、中庸の道を選ぶのが良いということです。

ただこのことを、悩みに悩んだ末に認めるならともかく、あまり簡単に認めてしまうのは危険です。そういう生き方をしていると人

生は妥協の連続で終わってしまうでしょう。

人が善人であること、賢いことは良いことです。神ご自身も望んでおられることです。しかしまず、善人すぎるとか賢すぎるとはどのようなことかを考えることにしましょう。

この世に善のみ行って罪を犯さないような人間はいません。また賢者になることも、神の前に欠け多い人間に出来ることではないのです。しかし現実には、人間は自分を善人や賢者だと見なしがちです。善人すぎるとか賢すぎるとはそういう人たちを指しています。

コヘレトは極端な善や賢さに警鐘を鳴らしているのです。絶対的な正義は完璧な知恵と同様、人間が到達することは不可能です。それは世界の歴史の中でイエス・キリストだけが体現されたのです。そのことをわきまえないで、自分だけがまるで完全な人でもあるかのようにふるまうならばどうなってしまうでしょう。ある人が罪を犯した時、周囲がよってたかってその人を集中攻撃するといったことがあります。自分は100パーセント正義の側に立っていて相手は100パーセント悪いとするとところにサタンがしのびよってきます。ここには赦しがありません。どんな人も罪人(つみびと)であるのに、その人間が正しすぎるということこそ問題なのです。その時、罪人が神よりも正しい人間になっているのです。

一方、憐れみ深い人が困った人のために熱心に施しをするあまり、財産を失ってしまうというケースもあるでしょう。その人の善意につけこんで、お金をだましとろうとする人もいるかもしれません。この場合、「善人すぎるな、賢すぎるな」を、主イエスが言われた「蛇のように賢く、鳩のように素直になりなさい」(マタイ 10:16)という言葉に結びつけて受け取るのが良いと思います。善人がその善意のために滅びてしまうことを神は望んでおられません。

本当の善と賢さを体現される神とキリストが、私たち一人ひとりを善に過ぎ、賢さに過ぎることから守ってください。

(2018年6月24日の礼拝説教より)

牧師 井上 豊